古川 薫

維新の烈風
―高杉晋作―

著者紹介

古川薫（ふるかわ・かおる）一九二五年山口県下関市に生まれる。山口大学卒。長州に住み長州の「人と文化」を追求する。主な著書は「走狗」「長州奇兵隊」「長州歴史散歩」「高杉晋作」「山口県人」「十三人の修羅」「炎と青雲」など。
現住所　山口県下関市長府羽衣町五八

田代光（たしろ・ひかる）一九一三年東京下谷に生まれる。十五歳で白日会に「自画像」が入選。十八歳で雑誌キングにさし絵執筆。以後「さし絵とは人間の縮図である」との信念のもとに、絵画的に人間を追求する。現在出版美術家連盟理事。
現住所　東京都台東区浅草三―二六―四

NDC 913

維新の烈風――高杉晋作――

昭和五十二年十一月三十日　第一刷発行

著　者　古川　薫
発行者　小峰広恵
発行所　株式会社　小峰書店
東京都新宿区舟町六　〒一六〇
電話〇三―三五七―三五三一　振替東京六―一九五五四

組　版　国際文化交易株式会社
本文印刷　株式会社　厚徳社
表紙印刷　合資会社　斎藤印刷所
製　本　小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります

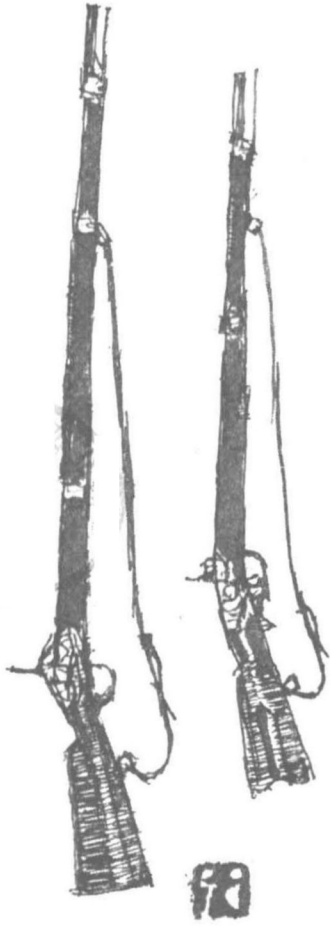
© 1977　古川　薫・田代　光

839[redacted]-6701-2349

古川薫

維新の烈風

―高杉晋作―



小峰書店

もくじ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに……9
松下村塾の秀才……20
不安な時代……20
おさないころ……24
明倫館……28
吉田松陰……37
友情のひろがり……52
暗殺計画……59
生と死と……68
安政の大獄……75
憂国の人……79
試撃行……90

志士変転……100
航海遠略策……100
上海で見たもの……110
軍艦を買おう……123
割拠論は夢か……125
イギリス公使館焼き打ち……130
松陰の骨……134
征夷大将軍！……137
チョンマゲを切る……140
奇兵隊の誕生……145
黒船砲撃……145
教法寺事件……156
長州藩の危機……163
脱藩・投獄……166
池田屋騒動と蛤門の変……173

発すれば風雨のごとし……176
黒船艦隊の来襲……176
福岡に亡命……183
功山寺挙兵……189
俗論党打倒……193
長州征伐令……198
四境戦争……204
小倉落城……206
もえつきた火……214
清水山にねむる……220

装幀・さし絵／田代光

維新の烈風—高杉晋作—

はじめに

きみたちのなかに、もし「自分はダメな人間だなあ」と思いこんでいるような人がいるとすれば、この本を読んで、勇気づけられるのではないだろうか。

なぜなら、この本の主人公である高杉晋作は、日本の英雄のひとりにかぞえられているが、少年時代から、勇ましく、りっぱな人物ではなかったからだ。あまえんぼうで、わがままで、身体の弱い子どもだった。

そんな晋作が、成長するにつれて、しだいにたくましい男になり、歴史に名をのこすほどの人物になっていくようすは、きみたちに、きっといろいろなことを教えてくれるはずだ。

山口県下関市の中心市街に、日和山という小高い丘がある。公園になっていて、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の頂上に、高杉晋作の像が立っている。これは備前焼の陶器でできているので陶像とよぶのだが、二メートル以上の大きなものだ。晋作は、関門海峡をながめている。

その晋作の陶像を、下から見上げると、かれがもっている刀が、たいへん長いことがわかる。わたしは、この像の原型を彫った人が、わざとそのようにつくったのだろうと思っていた。

ところが、晋作のことをくわしく調べているうちに、それが事実だということに気づいたのである。つまり晋作は、いつも長い刀をさしていたのだ。

「よく斬れて、長い刀をさがしてほしい。二尺五寸以上の刀を買いたいので、よろしくたのみます」という手紙を、晋作は友だちに書いている。ふつう武士がさしている刀は、二尺三寸（六十九センチ）以下が多かった。晋作はそれより長いものでなければ満足しないのである。なぜだろうか。

晋作は、柳生新陰流の免許をとった剣術の達人だった。だから長い刀をほしがったのかというと、どうもそうではないらしい。武士が使う刀は、身長から三尺（約九十センチ）を引いたのが適当だとされていた。背の低い人が、あまり長い刀をさしてい

高杉晋作陶像

ると、ぬくときにこまるので、やはり使いやすい刀をえらんだ。刀は重いから、疲れるといって、背の高い人でも、わざと短くかるい刀をこのむ。だから、晋作のように長い刀をさしている侍は少なかった。

ところで、高杉晋作の身長はどのくらいあったか。かれが着た衣服などがのこっているので、それをはかって推定すると、だいたい五尺三寸（一メートル六十センチ）だろうといわれている。江戸時代の日本人の身長は、それほど高くないが、これでは武士としてりっぱな体格とはいえなかった。晋作は、人なみに二尺三寸の刀をさしておればよかったのだ。

晋作は、友だちにくらべて、自分の背が低いことを気にしていた。そこで、刀だけでも人より長いのをもちたいと思ったのだろう。しかも剣術の達人だから、長い刀をさした晋作のことを、だれも笑わなかったし、むしろ尊敬の目で見ていた。

晋作が背の低い自分を気にしていた証拠がある。わたしは晋作の写真を三枚もっている。日本で最初に写真のスタジオが店開きしたのは、横浜と長崎で、どちらも文久二年（一八六二）だった。その当時、晋作は長崎へ行ったので、うつしてもらったの

だ。

晋作の写真の特徴は、かれがすわっているということだ。かならずすわっている。伊藤俊輔（のちの伊藤博文）といっしょにうつったときも、伊藤が立って、晋作はすわっている。これなら背くらべができない。一人のときも、やはりすわっている。そして、あの長い刀をだくようにしてもっている。

晋作が長い刀をもって、坂本竜馬のように、立って写真にうつっていてくれたら、その刀の長さから、晋作の身長がたしかめられたのにと、現代の研究家たちは残念がっている。晋作は、自分の背が高くなかったという証拠を、のこしたくなかったのかもしれない。

高杉晋作の刀や写真について、ながながと説明したのは、かれを理解するためにたいせつだと、わたしは考えたからだ。

心理学という学問があることを、知っているだろう。そのなかに青年心理学というのがある。この本を読んでいるきみたちも、青年心理学の対象にはいっていると思ってよい。

高杉晋作（左）と伊藤俊輔

青年心理のひとつの特徴は、劣等感をいだいていることだ。「自分はダメな人間だなあ」と思うのも劣等感である。「みんなにくらべて頭がわるいなあ」とか、「背が低い」とか「やせている」とか、「マスク（顔）がわるい」とか、いろいろなやみをもっている。インフェリオリティ・コンプレックスといわれているもので、これに思いあたらない人はいないはずだ。つまりコンプレックスをもっているのがとうぜんなのである。

努力して、そのコンプレックスに打ち勝とうとする意欲がわいてくる。これを青年心理学では、補償行為という。自分に足りないところを、おぎなおうとする行為（おこない）が、いつのまにか、その人をりっぱな人間にしている。

自信をもつこともたいせつだが、同時にコンプレックスを意識して、これを克服しようと努力する補償行為によって、人間は大成するのである。英雄や偉人の子ども時代を調べてみると、たいていそのような事実がかくされている。

ニーチェというドイツの哲学者は、若者のころ女の人の前に出ると、顔が赤くなって、ものがいえないほど気の弱い人だった。そんなかれが、やがて「超人の哲学」と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com